

『タルカバーシャー・プラカーシカー』 版本テキスト  
に対するBORI所蔵諸写本の検討：  
s´abda論の文章成立の三要件のテキストを中心に

メタデータ	言語: ja 出版者: 武蔵野大学仏教文化研究所 公開日: 2024-03-27 キーワード (Ja): ニヤーヤ学派, シャブダ論, タルカバーシャー・プラカーシカー, 写本研究 キーワード (En): 作成者: 森, 三喜 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000242">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000242</a>

The Critical Examination into the Published text of  
*Tarkabhāṣāprakāśikā* with Five Manuscripts collected by  
 Bhandarkar Oriental Research Institute:  
 Centering on the Argument of the Three Conditions  
 For a Sentence to Be Understood Correctly

MORI Miyoshi

**Summary**

The *Tarkabhāṣāprakāśikā* (TBhP) discussed in this paper is a commentary written by Cinna[ṃ]bhaṭṭa in the mid-14th century on the *Tarkabhāṣā* (TBh), a comprehensive work of the Nyāya school written by Keśava Miśra in the mid-13th century. Last year, the present author presented the research in the 73rd conference of the Japanese Association of Indian and Buddhist Studies, focusing on the śabda theory within TBhP. During this analysis, it was revealed that the only available version of TBhP had several textual issues, necessitating revisions based on the evidence from its manuscripts.

The present paper shows some progress of an analysis conducted on a portion of five manuscripts obtained by the author. In the present paper, the author examined the sections of the three conditions for a sentence to be understood correctly, based on the analysis of five newly acquired manuscripts. Thanks to the manuscripts, the four parts of the section treated in the present paper could be amended based on the evidence of the manuscripts.

The portion of TBhP scrutinized in the present paper has 67 variants from the manuscripts of A and B. Although the printed edition explains that there is no difference between the manuscripts A and C, and shows no variants of the manuscript-C for that reason, but the 36 footnotes of the manuscript-A are different from the readings of the manuscript-C, and only the 12 footnotes of B match the manuscript-B. In addition, it is also revealed in the present paper that some of the editor's suggested readings inserted or added to the text are not supported by any of the manuscripts. Therefore, the printed edition seems not to have the enough reliability as a critically edited text based on the evidence of the manuscripts.

(32)

The present paper points out the importance of re-examination of the manuscripts used by the editor. The errors of the printed text are already evident, and the revision using the newly acquired manuscripts in addition to the three used by the editor, may provide the textual improvements. In order to achieve the improvements, acquiring of the manuscript-A is considered critical. The improvements will enhance the scholarly value of TBhP and improve the textual accuracy, and then contribute to a deeper understanding of the philosophical developments in the Nyāya school till the 14th century.

『タルカバーシャー・プラカーシカー』版本テキストに対するBORI所蔵諸写本の検討  
—— sabda論の文章成立の三要件のテキストを中心に——

森 三 喜

〈研究ノート〉

# 『タルカバーシャー・プラカーシカー』版本テキスト に対する BORI 所蔵諸写本の検討

—— śabda 論の文章成立の三要件のテキストを中心に——

森 三喜

〈キーワード〉 ニヤーヤ学派／シャブダ論／タルカバーシャー・プラカーシカー／写本研究

## 1. 問題の所在と本稿の目的

本稿で取り上げる『タルカバーシャー・プラカーシカー』(*Tarkabhāṣāprakāśikā* 以下:『プラカーシカー』)は、ケーシャヴァ・ミシュラの手による13世紀中葉のニヤーヤ学派の綱要書『タルカ・バーシャー』(*Tarkabhāṣā*)に対する14世紀中葉と目されるチンナ(ム)バッタ (Cinna[m]bhāṭṭa, Cennubhāṭṭa)が著した注釈書である。本テキストについて、筆者は日本印度学仏教学会第73回学術大会にて、同テキストの *pramāṇa* 論の一部を構成する śabda 論のテキストについて扱い、その分析の過程で唯一の版本が抱えるテキスト上の諸問題点について、また写本に基づいたテキストの修訂の必要性について指摘し、その研究成果を拙稿(森 [2023a])として発表した。また、『プラカーシカー』の śabda 論のうち、大部を占める *sphoṭa* 説批判を行う箇所に対する訳注研究を行い、森 [2023b]としてまとめ、そのテキストの持つ学術的価値<sup>1)</sup>について論じた。

本稿は、以上の一連の研究調査により判明した『プラカーシカー』の版本が抱える問題に追加補強する形で、筆者が入手した写本の一部との照合の成果を提示するものである。本稿では、まず『プラカーシカー』の版本の基本情報およびそのテキストの持つ学術的性格を提示する。次いで筆者がすでに版本によって分析を行った śabda 論テキストのうち、文章成立の

三要件を論ずる箇所について、今回入手した5写本との照合の結果得られた知見を提示する。以上の作業を通じて、異読収集から得られた各写本から示唆される点、および拙稿（森 [2023a]、[2023b]）において指摘しているテキスト上の問題点に対する進展と写本に基づいた修正の可能性について中間報告を行う。

## 2. 『プラカーシカー』とその版本

『プラカーシカー』の特色については拙稿（森 [2023a]、[2023b]）にて言及したが、新ニヤーヤ以前のニヤーヤ学派が、ミーマーンサー学派などインド哲学諸学派と交わした論争の詳細については、今日まで先行研究が非常に乏しく、わずかに丸井 [2014] や Saito [2017] が確認される程度である。また、『プラカーシカー』自体を中心的に取り扱った研究としては、拙稿（森 [2023a]、[2023b]）の他には、Kawajiri [1995] が確認される程度である。『プラカーシカー』に類する綱要書ないしその注釈書としては、『タルカ・サングラハ』（*Tarkasamgraha*）や『タルカ・アムリタ』（*Tarkāmṛta*）などが挙げられるが、『プラカーシカー』は、取り扱われるトピックについて背景となる学派間の論争や、その際に根拠となる権威あるテキストを引いて言及するなど他の綱要書の注釈書とは一線を画すものであり、14世紀時点での古典ニヤーヤ学派の思想を知る上での手がかりとなるテキストとして有益であると考えられる。

しかしながら現時点で確認される『プラカーシカー』の版本は、Bhandarkar, Devadatta Ramkrishna. 1979. *Tarkabhāṣā with the commentary Tarkabhāṣāprakāśikā of Cinnamḥaṭṭa*. Bombay Sanskrit and Prakrit Series, LXXXIV. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute. (以下、「版本」) が唯一のものであり、本版本以外に出版テキストの情報は確認されていない。また、版本は Bhandarkar Oriental Research Institute (以下: BORI) 所蔵の写本に基づいて編集されているが、編者のイントロダクションの写本情報の項 (pp. XXV-XXVI) によれば、編者のよった写本は以下のとおりである。

写本 A : No. 758 of 1884-87 (フォリオ数 65 ; 行数 15 ; 文字数 43)

写本 B : No. 752 of 1887-91 (フォリオ数 68 ; 行数 13 ; 文字数 40)

写本 C : No. 285 of 1882-83 (フォリオ数 40 [冒頭 2 フォリオ欠落] ; 行数 17 ; 文字数 60)

編者は写本 A と写本 C の間に差異を認めておらず、それゆえに写本 C の異読情報はテキストのアパルトゥスには掲げていない。しかし、実際には編者がアパルトゥスに掲げる写本 A の読みと写本 C の読みが一致しない箇所が散見されるほか、写本 B の異読情報についても、実際の写本の読みと異なる箇所が随所に確認される。なお、詳細については、第 4 節 (写本ベースでの版本の不備と修訂の可能性を示す具体例) で中心的に言及する。

### 3. BORI 所蔵『プラカーシカー』写本および今回入手した写本について

現存している『プラカーシカー』の写本については *New Catalogus Catalogorum* (以下 : NCC) を参照すると、各地に写本が散在しており、100 点近くが確認される。本稿では、筆者が入手し、かつ版本が使用した 3 写本が含まれる BORI 所蔵の写本について言及する。以下に示すのは、NCC に記されている BORI 所蔵の写本を収集年代順に列記したものであり、NCC 上では 5 本が存在する。

Bhandarkar Oriental Research Institute

No. 54 of 1881-82 (写本 2)

No. 752 of 1887-91 (写本 B)

No. 285 of 1882-83 (写本 C)

No. 279 of 1895-98 (写本 3)

No. 758 of 1884-87 (写本 A)

以上が NCC で確認される BORI 所蔵の『プラカーシカー』の写本であるが、これに加えて、BORI 所蔵の『プラカーシカー』には、No.86 of

1873-76 (写本 1) という写本が存在することが今回の写本入手に際して判明した。このことから、BORI が所蔵する『プラカーシカー』の写本は NCC が提示する 5 本ではなく合計 6 本である。

今回入手した BORI 所蔵の『プラカーシカー』の写本は、編者が版本編集に際して使用した 3 写本のうち写本 A を除く写本 B、C の 2 本と、No.86 of 1873-76、No. 54 of 1881-82、No. 279 of 1895-98 の 3 本の計 5 本である。(本稿では便宜のため版本が使用した写本以外は特別な場合を除きそれぞれ写本 1、写本 2、写本 3 と記すこととする。各写本の基本情報などについては、本稿末尾の一次文献表を参照されたい。)

以上の 5 写本を用いて、『プラカーシカー』の一部との照合作業によって得られた結果について、次節より言及する。

#### 4. 写本ベースでの版本の不備と修訂の可能性を示す具体例

拙稿 (森 [2023a]) にて、『タルカパーシャー』および『プラカーシカー』の śabda 論の議論構成の分類を行ったが、本稿ではそれらのうち、(1) śabda の定義と文意認識成立の三要件 (ākāṅkṣā, yogyatā, samnidhi)、(2) 単語が如何にして三要件を具えるのか、(3) 最終的な文章の定義を論ずる箇所 (版本 pp.161-164) について、入手した上記の 5 写本を使用して調査を行った。範囲としてはわずかではあるが、現時点でもすでに、版本のアパルトゥスに掲げられている異読情報の信憑性や、版本編集の際に行われた写本検討に対する信頼性が極めて低いと言わざるをえない点など、多くの問題が存在していることが明らかとなってきた。また、上述した範囲において、筆者が推定によって読みを修正していた箇所についても入手した 5 写本に基づいた実証的な修正が可能であることも明らかとなっている。したがって、本稿では現時点で判明している以上の点について、適宜写本の異読情報とともに示していく。

筆者が版本の śabda 論のテキスト分析に際して、読解上推定によって読みを修正した箇所が 20 箇所以上にのぼったが、本稿で扱った議論の範囲

でも4箇所を推定によって修正を行なっている。今回の写本調査によって、前述の4箇所は全て写本に基づいて修正することが可能であった。またこれらの修正のうち3箇所は、当該の修正箇所が全ての写本を通して一致しており、また版本の使用写本についての異読情報も存在していないことから、これらは版本の誤植であると指摘可能と考えられる。以下に示すのは当該箇所の版本のテキストと写本の異読情報、またそれに基づいた修訂後のテキストである(太字は修正箇所、Ωは全ての写本を指す。また、版本がアパラトゥスに掲げる異読を示す場合はE<sub>f</sub>とする)。

【事例1】

版本(p.161, l.8) tataś ca bhrāntoktavākyaṛthasya bādhitatvenābādhitavam̐ nāsti |  
 異読情報 bādhitatvenābādhitavam̐ 写本 B, C, 3; bādhitatvena nābādhitavam̐  
 写本 1; bādhitatvonābādhitavam̐ 写本 2  
 修訂後 tataś ca bhrāntoktavākyaṛthasya bādhitatvenābādhitavam̐ nāsti |

上記の該当箇所は語形派生の点から想定し得ない語形となっている。

以上の写本の異読情報から、版本テキストの当該箇所の直前に現れる-ta-に起因する重字脱落であると考えられ、以上のように修正されうる。

【事例2】

版本(p.161, ll.10-11) vipralambhakasya yathārthadarśitave 'pi yathārthavāditvābhāvād iti bhrāntavipralambhakayor āptatvam̐ parākṛtam ity arthaḥ |  
 異読情報 yathārthadarśitve Ω; yathārthadarśityepi E<sub>fA</sub>  
 修訂後 vipralambhakasya yathārthadarśitve 'pi yathārthavāditvābhāvād iti bhrāntavipralambhakayor āptatvam̐ parākṛtam ity arthaḥ |

上記の版本テキストの当該箇所では、darśitave となっており、敢えてこの語の語形派生の説明を行うのであれば、darśi- という語幹に過去受動分詞語尾の -ta および抽象名詞を形成する語尾 -tva が付属した形ということ



は一応可能であるが、当該単語の語根は√dṛś であり、過去受動分詞形は dṛśta となることから、語形派生上不合理な形態である。

全ての写本で版本テキストに現れる語形は確認されない。これらの写本の読みから、版本テキストの当該箇所は後続する語尾 -tva に起因する重複書写であると考えられる。なお、当該テキストの前に現れるテキストでは、bhrāntasya yathārthadarśitvābhāvāt | […] (p.161, ll.8-9) と、適切と考えられる語形で現れている。

加えて、以下の箇所は該当単語に否定を示す接頭辞が付属するか否かという、テキストを解読する上で意味を大きく左右する問題を抱えている。

### 【事例 3】

版本 (p.162, ll.2-3) tarhi ākāṅkṣāvataṃ padānāṃ samūho vākyam ity astu kiṃ yogyatā-grahaṇenety āśaṅkya yogyatāgrahaṇasyopayogam āha—agninety | ata ity anuṣajyate yasmād ayogyatāgrahaṇaṃ kṛtaṃ tasmād ity arthaḥ |

異読情報 yasmād yogyatāgrahaṇaṃ 写本 B, C, 2, 3; tasmād yogatāgrahaṇaṃ 写本1  
 修訂後 yasmād yogyatāgrahaṇaṃ kṛtaṃ tasmād ity arthaḥ |

この箇所は『タルカ・バーシャー』にて適合性 (yogyatā) が欠如した文章の例示を行う箇所<sup>2)</sup> に対する注釈の一部である。以下に版本テキストに基づいた拙訳を示す。

訳：その場合、文章とは期待性を持つ諸単語の集合であるというだけで十分だ、適合性という語に何の意味があろうか。という反論を想定して、適合性という語を用いる意味を [ケーシャヴァ・ミシュラは] 述べる。「火によって (agninā)」と。「これ故に (ata [s])」という語はこの箇所 (agninā siñced) にまでかかっている。非適合性という語が述べられるから、という意味である。

版本の通りに訳した場合、以上のようになるが、当該箇所は『タルカ・バーシャー』で適合性という語が用いられる意味についてを、対論者からの想定反論という形で注釈している箇所であり、文脈上この箇所を「非適

合性 (ayogyatā)」という語で読むのは不適當であり、「適合性 (yogyatā)」と解釈すべきである。

当該箇所について、版本はデーヴァナーガリー文字を用いて編集されているが、yasmād が行末に位置して改行されており、省文字が脱落したことに起因する誤植であると考えられる。

ほぼ全ての写本で当該箇所に否定の接頭辞となりうる a- は存在せず、また使用単語と語形をやや異にする写本 1 においても、同様に a- は確認されない。修訂後の訳は次のようになる。

訳：その場合、文章とは期待性を持つ諸単語の集合であるというだけで十分だ、適合性という語に何の意味があろうか。という反論を想定して、適合性という語を用いる意味を [ケーシャヴァ・ミシュラは] 述べる。「火によって (agninā)」と。「これ故に (ata [s])」という語はこの箇所 (agninā siñced) にまでかかっている。適合性という語が述べられるから、という意味である。

以上の三例は、入手写本全てに共通する読みが現れ、またアパラトゥスに版本の使用写本の異読としても掲げられていないことから、版本の誤植と判断可能であると言える。

また、次に示す箇所は、筆者が読解上より適切であると考え当初推定して修正した箇所である。この箇所について、版本上ではアパラトゥスに特段の異読情報は掲げられておらず推定によったが、写本 A と一致することから版本では異読情報が掲げられていなかった写本 C に、筆者の推定を支持する読みが提示されていることが確認された。

#### 【事例 4】

版本 (p.161, ll.9-10) vipralambhoktavākyaṛthasyāpi bādhitatvenābādhitvaṃ nāsti |  
 異読情報 vipralambhakokta 写本 C; vipralambhokta 写本 B, 1, 2, 3  
 修訂後 vipralambhakoktavākyaṛthasyāpi bādhitatvenābādhitvaṃ nāsti |

この箇所では、意味上 ukta の行為主体となるのは直前の vipralambha で

あるが、その語形は行為者であることを示す接尾辞を伴った vipralambhaka が望ましい。

多くの写本で版本と同様の語形が提示されるが、当該箇所以外に現れるものは全て vipralambhaka となっており、また意味上この箇所のみ vipralambha とする特段の必要性も存在しないことから、この箇所は写本 C に基づいて以上のように修正されうる。

以上から、筆者が当初推定によって修正した4箇所は、写本に基づいた修正が可能であることが示される。また、4例目について、版本では写本 C のテキストは写本 A と一致するとして、その異読情報は掲げられていない。しかし本稿第2節（『プラカーシカー』とその版本）でも示したように、あらためて写本 C を確認した際に読解上考慮に値すると考えられる異読が含まれている。

今回写本を調査した範囲で、版本が掲げる写本 A の異読は全部で42箇所であるが、このうち写本 C の読みと一致しているのは6箇所<sup>3)</sup>のみである。残りの36箇所は一致していないほか、これら写本 A の異読と不一致の写本 C の読み36箇所のうち、29箇所は版本テキストと一致している。残る7箇所は、版本テキストとも  $Ef_A$  ととも一致しない写本 C にのみ確認される異読情報である。写本 A と写本 C とで一致している異読、および、写本 A とは一致していないが版本テキストに一致する写本 C の読みについては、上述の情報をもとに版本を確認することで想定が可能であるが、いずれにも属さないこれら7点の異読については、資料としての価値を考慮し版本のテキストとともに以下に掲げる。なお、下記のうち p.163, l.14 に示すものは、版本では二分割してそれぞれに写本 A の異読が示されているが、便宜上一つにまとめた都合で提示する上では6点となっている。

1: 版本 (p.161, l.17 ※以下ページ・行数のみを示す。また  $Ef_A$  の異読のうち、括弧内に示す部分は写本 C の読みに含まれる部分を本文から補ったものである。) tasmād gaur aśva ityādīpadasamūhasya;  $Ef_A$  (tasmād) gaur aśvaś ca (ityādīpadasamūhasya); 写本 C gaur aśva puruṣo hastī ityādinām api padasamūhasya

2 : p.162, 1.11 ākāṅkṣādītrayasya;  $Ef_A$  (ākāṅkṣādi)trayasyavattvāt 写本 C ākāṅkṣādīpadatrayasya

3 : p.163, 1.14 na saṁbhavatīty āha—na ceti |;  $Ef_A$  na samastīty āha (na ceti) 写本 C<sup>4)</sup> na satīty āha na ceti

4 : p.164, 1.2 saṁbhavāt kim;  $Ef_A$  saṁbhavet (kim) 写本 C<sup>5)</sup> saṁbhavoktir

5 : p.164, 1.3 pakṣāntaram;  $Ef_A$  saṁjñāntaram 写本 C<sup>6)</sup> saṁjñāntaram

6 : p.164, 1.12 tādr̥śānām;  $Ef_A$  sād̥r̥śyam 写本 C tādr̥śām

他方、同様に今回の写本調査の範囲内で、版本が写本 B の異読として掲げるものは全部で 25 箇所あるが、そのうち一致するのは 12 箇所<sup>7)</sup>で、それ以外は実際の写本 B の読みと一致していない。一致しない残りの 13 箇所のうち 7 箇所<sup>8)</sup>の異読は実際には版本テキストと一致しているほか、残りの 6 箇所のうち、4 箇所<sup>9)</sup>の異読情報は、実際の写本には本文として現れるものではない行間に現れる追記の情報を混同して記載されているものである。なお、残りの 2 箇所についてであるが、これらは本文ともアパルトゥスに掲げられた  $Ef_B$  の異読とも一致しないものである。これら 2 箇所については以下の通りである。

1 : p.162, 1.12 prayojanatvād etantritayaviśiṣṭāni  $Ef_B$  prayojanatvād anas trayaviśiṣṭāni 写本 B prayojanavatvād atas trayaviśiṣṭāni

2 : p.162, 1.17 vākyam ity arthaḥ |  $Ef_B$  vākyam ity alaukikavākyam 写本 B vākyam ity (arthaḥ)<sup>10)</sup>

版本ではマージンの情報については、欄外や行間に補われた注の読みであることをアパルトゥスに記載している箇所がある一方、そのような読みをそのまま写本の本文にあるかのような異読として掲げている箇所も写本 B の検討から判明しているほか、版本の異読として掲げられていない写本 B の異読は瑣末なものまでを考慮した場合、本稿で取り扱った箇所の中だけでも 127 箇所存在し、版本編集者の判断により相当の取捨選択が行われ

ている、もしくは見落とされている可能性が多分に存在し、テキスト解読上の異読採用の可否にも関与する問題が存在する。

本稿で調査を行った範囲に含まれる、版本が提示する異読  $Ef_A$   $Ef_B$  は合計で 67 箇所存在するが、これらのうち、 $Ef_A$  は総数 42 箇所のうち 36 箇所とほぼ全ての箇所で、同一テキストであると版本が言及する写本 C の読みと一致しておらず、また  $Ef_B$  では実際に写本 B の読みと一致しているのは 25 箇所のうち 12 箇所にとどまり、残りの 13 箇所は一致していないことから、今回の調査範囲に含まれる異読の総数 67 箇所のうち、49 箇所はその信憑性に疑義が存在する状況である。またこのような状況から、版本が提示する  $Ef_A$  についても実際の写本と一致しているか疑わしいと言わざるを得ず、今現在未入手である写本 A を入手の上、 $Ef_A$  の異読情報の正確性を検証することがより急務であると考えられる。

加えて、版本編集者の推定によって本文に挿入ないし追加されたと考えられるものについても、実際には全ての写本で編集者の推定する読みが確認されない箇所が存在している。今回の調査範囲について言えば、版本テキスト p.161, l.6 に  $\bar{a}pt\bar{a}(a?)s$  tv iti とあり、アパルトゥスには写本 A の異読として  $Ef_A$   $\bar{a}ptas$  tv iti をあげているが、入手した 5 写本全てでこの箇所は  $Ef_A$  と同じ読みが提示されており、版本が掲げる  $\bar{a}pt\bar{a}s$  tv iti というような推定の読みは写本上には確認されない。

以上の写本調査の結果から、版本は誠実に写本に基づいた正確な校訂テキストとしての性格を有しているとは言い難く、実際のテキスト分析に際して実用に耐えうるものと評価するには難がある。他方、上述したように、写本に基づいたテキストの修正が可能であることは、本稿で扱った版本の一部と、それに対応する写本の箇所との照合作業の結果からも明らかである。また版本ではアパルトゥスに掲げる異読情報が、実際には当該写本の本文ではなくマージンの情報である箇所も存在している。以上から、版本が使用した写本の再検討および今回入手した版本が使用していない写本の検討を行う価値はあると考えられる。

## 5. まとめ

現段階では写本調査は進行中であり、上述した点はまだ解明途上であるが、今後本格的に行っていく異読収集および網羅的な調査の結果、上記5写本の系統的關係性などが明らかにされることが期待される。また、版本の不備は現段階でも明らかなものであることは確実であり、また版本が使用した3写本のうち2写本に加え、今回入手した3写本の計5写本による修訂であっても、十分にテキスト上の改善が見込めるものであると考えられる。また、なお一層の正確性を期すために未入手の写本Aについても入手が急務である。以上の写本の異読収集および批判的検討が、『プラカーシカー』の資料的価値を高め、その分析の正確性を期することになると考えられるほか、それによって14世紀時点までの古典期のニヤーヤ学派の思想的展開の究明に資することは確かであると考えられる。

### 註

- 1) 『プラカーシカー』の抱えるテキスト上の問題と学術資料的価値については、丸井 [2023] でも指摘されている。
- 2) 『タルカ・パーシャー』 (p.17, l.2) 'agninā siñced' iti na vākyam योगyatāvīrahāt |
- 3) 版本 p.161, l.6, 18; p.162, l.11, 19; p.163, l.6, 15
- 4) 行間に na sambhavaṭṭy āha と追記が確認される。
- 5) 行間に vāt kim の追記が確認される。
- 6) この異読については、写本Aと一致するものの、写本Cではこの語の位置する行間に pakṣāntaram の追記が確認される。
- 7) 版本 p.161, l.3, 7; p.162, l. 6, 17; p.163, 2, 6, 9, 10, 14-15; p.164, l.10
- 8) 版本 p.161, l.1, 5, 6, 17; p.162, l.13; p.163, l.7, 8
- 9) 版本 p.161, l.2, 9; p.163, l.14; 17
- 10) 括弧内の arthaḥ は行間に追記されている情報である。

### 略号・一次文献および使用写本

BORI : Bhandarkar Oriental Research Institute

NCC : *New Catalogus Catalogorum*

*K. Kunjuni Raja, New Catalogus Catalogorum An Alphabetical Register of Sanskrit and Allied Works and Authors, Vol. 8, 1974, Madras*

**Tarkabhāṣā**

Kulkarni, Narayan Nathaji. 1953. *Tarkabhāṣā (Exposition of Reasoning) by Keśava Miśra*. Poona Oriental Series, No. 17. Poona: Oriental Book Agency. (底本)

Iyer, S. R. 1979. *Tarkabhāṣā of Keśava Miśra Edited with Translation, Notes and an Introduction in English*. Gokuldas Sanskrit Series No. 36. Varanasi: ChaukamBha Orientalia.

**Tarkabhāṣāprakāśikā**

Bhandarkar, Devadatta Ramkrishna. 1979. *Tarkabhāṣā with the commentary Tarkabhāṣā-prakāśikā of Cinnambhaṭṭa*. Bombay Sanskrit and Prakrit Series, LXXXIV. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.

『プラカーシカー』使用5写本（未入手の写本Aを除く）

## No. 86 of 1873-76 (写本1)

所蔵：BORI、サイズ：縦4.25inch×横10.25 inch、言語：サンスクリット、文字：デーヴァナーガリー、材質：紙、フォリオ数：42（欠落なし）、1ページ当たりの行数：17、1行当たりの文字数：60前後、欄外注の有無：有、備考：フォリオ18aの7行目途中から明らかに文字が変化しており、筆写した人物が変わっていると考えられる。また本写本はNCCに掲載されていない。加えて、他の写本と共通する重字脱落や重複書写が少なく、他の写本に比して文字や単語の欠損は少ない。

## No. 54 of 1881-82 (写本2)

所蔵：BORI、サイズ：縦4.25inch×横10 inch、言語：サンスクリット、文字：デーヴァナーガリー、材質：紙、フォリオ数：60（欠落なし）、1ページ当たりの行数：15、1行当たりの文字数：50前後、欄外注の有無：無、備考：svargaのようにr音がg音が続く際に、svargraとr音の記号を重複して書く傾向が見られる。これについては写本Bにも同様の傾向が存在する。入手した他の写本に比べ誤写が散見される。

## No. 285 of 1882-83 (写本C)

所蔵：BORI、サイズ：縦4.25inch×横9.5 inch、言語：サンスクリット、文字：デーヴァナーガリー、材質：紙、フォリオ数：39（フォリオ1、2欠落）、1ページ当たりの行数：18、1行当たりの文字数：65前後、欄外注の有無：有、備考：本文中において、不適当な読みと思われる箇所には、相当数の箇所、その読みが現れる行間上部に正規形と考えられる読みを示す注が補われているほか、欄外注を比較的多く含んでいる。

No. 752 of 1887-91 (写本 B)

所蔵：BORI、サイズ：縦 4.5inch×横 10.25 inch、言語：サンスクリット、文字：デーヴァナーガリー、材質：紙、フォリオ数：68 (フォリオ 1a, 68b が白紙となっているが、内容に欠損はない。)、1 ページ当たりの行数：13、1 行当たりの文字数：45 前後、欄外注の有無：有、備考：修正によって塗りつぶされた箇所が諸所に見受けられる。r 音の記号を重複して書く傾向が存在する (写本 2 備考参照)。

No. 279 of 1895-98 (写本 3)

所蔵：BORI、サイズ：縦 11cm×横 25.5cm、言語：サンスクリット、文字：デーヴァナーガリー、材質：紙、フォリオ数：32 (フォリオ 1 欠落)、1 ページ当たりの行数：21、1 行当たりの文字数：60 前後、欄外注の有無：有、備考：虫害と思われる腐食により判読が困難である箇所が諸所に見受けられる。写本 3 のみ写本のサイズがセンチメートル表記となっているが、寸法については写本情報に記載されているものに従っており、ずれが生じるためセンチメートルには変換せず記載通りのデータを示した。なお、本写本に関してはサンヴァット暦 1714 年のものであることが写本情報備考欄に示されている。

## 二次文献

Kawajiri Michiya (川尻道哉) 1995. “Critisism of Sphota in the Nyayakandali and the Tarkabasaprasika”. 『印度學佛教學研究』 43 (2)

Saito Akane (齊藤茜) 2017. “On the Theory of Phonemes Conveying the Sentence Meaning”. 『印度學佛教學研究』 65 (3)

丸井浩 2014. 『ジャヤンタ研究—中世カシミールの文人が語るニヤーヤ哲学—』. 山喜房佛書林

———2023. 「「無」(abhāva)の認識手段をめぐるニヤーヤ学派の議論—*Tarkabhāṣāprakāśikā*の〈無の認識手段論〉の解説—」『武蔵野大学仏教文化研究所紀要』 (39)

森三喜 2023a 「『タルカパーシャー・プラカーシカー』の śabda 論—単語認識をめぐる議論を中心として—」『印度學佛教學研究』 71 卷 (2)

———2023b 「*Tarkabhāṣāprakāśikā*の単語認識をめぐる議論—sphoṭa 説批判の訳注研究を中心として—」『武蔵野大学仏教文化研究所紀要』 (39)

(武蔵野大学大学院博士後期課程)